

【開催報告】

タケダ・ウェルビーイング・プログラム「長期療養の子どもたちと家族の支援のための中間交流会」を2017年9月2日（土）に開催しました！

本プログラムは、小児がんなどの難病により長期療養する子どもたちとその家族を支える市民活動を応援するものです。

2014年より第2期がスタートしましたが、3年目となるこの時期に中間交流会を企画しました。交流会では、「地域における支援の輪をどのように広げるか」をテーマに、団体同士がお互いの活動や課題を共有しながら共に考え、そしてよりよい支援につなげることを目的に、武田薬品工業株式会社京都薬用植物園にて開催しました。

当日は第2期の助成対象団体9団体、第1期の助成対象団体2団体、アドバイザー、武田薬品工業株式会社担当者、特定非営利活動法人市民社会創造ファンド担当者、計28名が参加しました。



1. 京都薬用植物園の見学



午前中は、任意参加で薬用植物園内を見学しました。初めに京都薬用植物園館長 松岡氏よりレクチャーを受けた後、2グループに分かれ、東京ドーム2つ分ある広い園内を学芸員と共に見学しました。展示棟（生薬の標本等が展示）、民間薬園（世界各地で伝統的に用いられている薬用植物の栽培・展示）、香辛料園（メディカルハーブをテーマ別に栽培・展示）、漢方処方園（漢方処方方の構成生薬を育てた薬用植物で栽培・展示）などを学芸員から説明を受け、ときには植物の香りや味を楽しみながら散策しました。見学を終える頃には参加者同士、すっかり打ち解けることができました。

2. 団体発表

午後は、下記の9団体より、活動内容及び助成プロジェクト内容、運営上で抱える課題等について発表が行われました。発表については、本プログラムのアドバイザーである長沢恵美子氏（一般社団法人日本経済団体連合会 教育・CSR本部 統括主幹）、大森智恵子氏（特定非営利活動法人子ども劇場千葉県センター 専務理事）からコメントもいただきました。同じ思いを持った団体同士がお互いの活動内容を知り、共感とともに心強さも感じたようです。



（報告団体）

- ・一般社団法人こどものホスピスプロジェクト（2014助成）〈大阪〉
 - ―地域で病気療養する子どもときょうだいを支えるための「あそびかた研究会」の実施
- ・特定非営利活動法人こどもコミュニティケア（2014助成）〈兵庫〉
 - ―長期療養の子どもたちも地域で一緒に育ちあう、共生保育を担うスタッフ育成のためのキャリアパス・プログラムの開発
- ・認定NPO法人ニコちゃんの会（2015助成）〈福岡〉
 - ―重い病気や障がいのある子どもに関わる人材育成のためのコミュニケーション講座「ニコゼミ」の開催
- ・特定非営利活動法人親子はねやすめ（2016年助成）〈東京〉
 - ―医療的ケアの必要な子どもとその家族のレスパイトによる疲弊防止活動
- ・特定非営利活動法人ポケットサポート（2016年助成）〈岡山〉
 - ―病弱児と関わる学習支援ボランティア育成

- ・特定非営利活動法人しむたね（2016年助成）〈大阪〉
 - －病気の子どものきょうだい支援を広げるためのシブリングサポーターの養成
- ・認定NPO法人NEXTTEP（2015・2016助成）〈熊本〉
 - －長期的に医療的ケアの必要な子どもたちと家族の在宅生活を支える人材育成プロジェクト
- ・特定非営利活動法人ホスピタル・プレイ協会 すべての子どもの遊びと支援を考える会（2015・2016助成）〈静岡〉
 - －ホスピタル・プレイによる在宅支援システムの構築
- ・バクバクの会（2014・2015・2016助成）〈大阪〉
 - －医療的ケアの必要な子どもたちのための地域啓発に向けた広報ツールの作成と普及啓発

3. ミニセミナー

続いて、一般社団法人こどものホスピスプロジェクトの水谷綾氏（ゼネラルマネージャー・事務局長）より、「地域での支援の輪を広げるために私たちが出来ること」と題してミニセミナーを行いました。

セミナーでは、団体自身が「社会からどう思われる組織でありたいか」の問いにスタッフ全員で考え、「不動のバリュー」として共有することの大切さと、団体の思いや活動内容を「誰に伝えるのか、何を伝えるのか、どう伝えるのか」について、具体の事例とともに学びました。短い時間ではありましたが、内容が深く、各団体とも、今後、活動を進めていくうえでのヒントと気づきを得ることができたことでしょう。



4. さいごに

中間交流会の最後は、中庭に面した会場で懇親会を行いました。1日を通してすっかり打ち解けた団体同士、話が尽きることはありませんでした。

今回の交流会では、団体同士がお互いに顔を合わせて交流することで、ゆるやかなネットワークが生まれることも期待しました。京都薬用植物園という非日常の空間とゆったりとした時間がリラックスした雰囲気を生み出し、活発な意見交換にもつながったようです。早速に「活動のコラボレーションを計画する予定」などの報告も届いており、事務局としても嬉しく感じています。



本プログラムの対象領域は、社会での認知も弱く、まだまだ発信していくことが求められます。1つの団体からではなく、複数の団体が共に社会にメッセージを伝えていくことが、より大きな力となるかもしれません。中間交流会は第2期のプログラムとしては初の試みでしたが、今後もよりよい支援につながるような企画に取り組んでいきたいと思えます。

（記録作成：市民社会創造ファンド 霜田美奈）